

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530718
 研究課題名（和文）アジア太平洋戦争と教育科学研究会の発足・解散・再建
 研究課題名（英文）The Aisa-Pacific-War and
 the establishment-dissolution-reconstruction of “Kyouikukagakukenkyuukai”

研究代表者

佐藤 広美 (SATO HIROMI)
 東京家政学院大学・家政学部・教授
 研究者番号：20205959

研究成果の概要（和文）：戦後、教育科学研究会（委員長は勝田守一）は、戦時下の戦争協力を反省し、教育的価値の実現こそ重要であると自覚し、子どもと社会をつなぐ教育学を形成していったこと、を実証した（報告書刊行）。別に、坂元忠芳都立大学名誉教授は、佐藤広美の自らの聞き取り調査をもとにして、『勝田守一教育学ノートその戦前と戦後』（別冊）を刊行した。

研究成果の概要（英文）：In Japan after World War II, “kyouikukagakukenkyuukai” regretted the involved cooperation war and recognized the realization of educational value and made efforts to create pedagogy of that connection child with society. In cooperating with Hiromi Sato, Tadayoshi Sakamoto (Professor emeritus of Metropolitan University) wrote “The Note on Pedagogy of Moriiti Katuta - through from the prewar to the postwar.”

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究

分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育思想、教育科学、アジア太平洋戦争、戦後教育改革、教育実践、教育的価値、勝田守一

1. 研究開始当初の背景

佐藤広美は、博士論文『総力戦体制と教育科学』（1995年）を書いて、戦前の教育科学研究会の教育思想を総括した。しかし、戦前

の教育科学が戦後、どのようにして再生したのか、いかなる戦前の反省を踏まえて、再出発したのか、その検討はできていなかった。

また、他の諸研究でも、戦前と戦後をつないだ教育科学研究会の教育思想の検討は皆

無であった。戦前と戦後の教育科学が、それぞれ、バラバラに検討されていて、両者を繋ぐ研究はできていなかった。戦前と戦後を繋ぐ研究は、いくつかの重要な難題を抱えていたからである。

その一つは、戦争責任問題（戦争協力）という問題である。教育学における戦争責任をどのように解くのか、断罪ではなく、その必然性を理論的に解き明かし、アジアにおける真の責任をとるための教育科学の理論的弱点を本格的に検討する必要がある。しかも、それが、いかに、戦後の再出発における時点で、自覚されていたのか、どうか、を見きわめることであった。

第二に、戦後教育改革の理念が再検討にふされている事情が考慮される必要がある。現在のグローバリゼーションの教育改革の進展に応じて、戦後教育改革の不十分性がずいぶん指摘されるようになった。グローバリゼーションと戦後教育改革との比較が重要な局面に至ったのである。現在の教育改革理念を戦後教育改革理念の検討を通して、その妥当性(問題点)を明らかにすることが重要視されてきた。

教育科学研究会の戦後再建における教育学の構想・理念の検討はこの二つの課題を解明する不可欠の課題にであったのである。

本研究は、この重要な課題を解くために行われたのである。

2. 研究の目的

教育科学研究会は、戦前の1937年に結成された民間教育研究運動団体である。その当時の教育政策に対し批判的な立場を表明し、「教育改革のための教育科学」の形成を主張した。その成果は、戦前における最良の遺産の一つの評価されてきた。しかし、教育科学研究会は、その後、戦争に協力し、そして、解散(1941年)を余儀なくされた。複雑な性格を所持しており、その理論的な検討は重要な課題であった。

その教育科学研究会は、1952年、再建を行う。そして、現在まで活動を続けている。

戦後の教育科学研究会は、戦前のときより、いっそう、教育政策批判を鮮明にして、教育改革のための教育学を創造していく。教育学界を理論的にリードし、民間教育運動や教育ジャーナリズムに多大の影響を与えてきた。その理論的成果は、国民教育論や国民の教育権論(発達論や学習権論)に結実してきた。

なぜ、教育科学研究会は、再建したのだろうか。戦前の活動をどのように総括して、反省し、再建を行ったのだろうか。その点の解明は全く不十分であった。教育科学研究会の国民教育論や国民の教育権論は、いったい、どのような戦前の反省の上に立って、形成さ

れてきたのか、その解明である。

本研究の目的は、この結成・解散・再建にいたる教育科学研究会の教育思想の検討を行うことが目的である。

3. 研究の方法

大きく二つの分野で仕事を進めた。第一は、坂元忠芳都立大学名誉教授への聞き取り調査である。坂元氏には、教育科学研究会の戦後初代委員長であった勝田守一東大教授

(1908年から1969年)の教育学について、語ってもらうようにした。坂元氏は、学生の頃より、勝田に教えを受け、その後も教育科学研究会の研究活動をいっしょに行い、さまざまな影響を受けてきた。坂元氏は、勝田が亡くなったあと、教育科学研究会の副委員長として、重職を担われてきた。

3年間、坂元氏は、ゆっくりと勝田の著作を調べ上げ、主に夏の研究合宿など行って、勝田について、語ってもらった。報告は膨大なものになり、テープを起こして、記録していった。なお、この聞き取り調査には、協力者を2人お願いした。細金恒男早大教授と前田晶子鹿児島大学准教授である。細金、前田両氏の質問を交えて、聞き取りはすすめられた。これを三年間続け、坂元氏には、その記録をもとに、最終的に、原稿を書き上げてもらった。

二つ目は、教育科学研究会編集の『教育』(1951年11月～)を徹底的に調べ上げ、教育科学研究会の理論動向を分析することであった。あわせ、この分析作業を進めるために、視点づくりとして、現在の教育改革理念を探る作業を同時並行して、すすめた。2006年の教育基本法の改正問題を中心に、その理念分析と政策の背景分析をすすめた。もう一つは、戦後教育学批判が近年盛んであるが、その問題性を明らかにするためにも、戦後の教育科学研究会の理論展開を詳細に分析することであった。

『教育』の分析は、主に、勝田守一を中心に、その理論の展開を検討した。

『教育』分析は、1951年から1955年を第1期、50年代後半を第2期、そして、1976年の活動方針に至までの時期を第3期に設定して、分析をすすめた。

分析視点は、戦前の総括、戦後教育改革の把握、新教育運動の評価、そして、生活綴方教育運動の評価であった。1950年代後半に、勝田は「教育的価値」論を展開するのだが、それが何故のことであったのか、そして、勝田の後、後継者が、それをどのように発展させようとしたのか、その分析であった。

なお、戦前の教育科学研究会の結成・解散については、具体的な分析はしなかった。結成と解散は、戦後、教育科学研究会が、自ら、

この問題をどのように認識したのか、という点において、解明を試みた。

4. 研究成果

佐藤広美は、科研費報告書『アジア太平洋戦争と教育科学研究会の発足・解散・再建』（総頁 66 頁）をまとめ上げた。なお、これには、研究協力者であった前田晶子鹿児島大学准教授の「現代の教育改革における教師の「使命感」の問題—勝田守一の「教師の倫理的支柱」論に学ぶ」を寄稿していただいた。現代の教師改革の問題を勝田論文に探る貴重な論稿である。

佐藤広美は、7本の論稿を書いた。これは、これまでに書いてきた論稿に修正を加え、一つのまとまりをつけて、再編集してできあがったものである。

論文は次の通りである。

- ・「なぜ、教育科学研究会は再建されたのか—教育と教育学の危機」
- ・「再建時、教育科学研究会の平和教育論—戦争をなくすことができるのか」
- ・「戦争体験の思想化と教育学の課題—戦争・モラル・教育」
- ・「戦後教育学における「倫理的な問い」—1950年代の『教育』と勝田守一」
- ・「子ども把握と教育実践の全体構造—1970年代の「教育的価値論」（勝田守一）の深まり」
- ・「戦後教育思想とナショナリズムの問題—人間性とナショナリズムの間」
- ・「教育学の戦争責任を問う意味は何か—戦時下の宮原誠一を問いながら」

教育科学研究会の発足・解散・再建を通史的に論じるのではなく、戦後の教育科学研究会が、戦前の自分たちの活動をどのように総括し、反省し、戦後、いかなる教育学を創造しようとしたのかを、検討した論文となっている。戦後教育思想史研究である。

教育科学研究会が再建されたのは、冷戦構造が成立した 1952 年であった。教育と教育学は重大な危機に直面し、教育科学研究会は、戦争責任を自覚し、新教育運動の弱点を指摘し、教育政策を批判するところから、自らの教育研究運動を開始した。戦前との関連で分析を試みたものは、この報告書が本格的な最初のものだといってよいだろう。

教育科学研究会は、この三つの批判を通して、教育学は、子どもを中心に置き、子どもからの教育学を提起し、子どもと社会を繋ぐ教育学を構想しようとした。「教育的価値」の創造であった。

1970年代以降、教育科学研究会は、この教育的価値論の深化につとめ、資本・ネーション・国家に対峙する教育の可能性を模索していく。戦後教育学の批判的継承が必要である

ことを論じた。その意味で、今日流行の戦後教育学批判は、勝田教育学を意図的に矮小化するなど、大きな問題を抱えていることを明らかにした。

坂元忠芳報告書『勝田守一教育学ノート—その戦前と戦後』（総頁 232 頁）別冊として、刊行した。これは、聞き取り調査の成果であり、坂元氏が、これを基にして完成されたものである。

目次を示せば以下の通りである。

第一部 戦前から戦後へ

勝田の教育学的思惟の発展段階、勝田教育学の「遠近法」、戦前・戦中における勝田の苦悩、戦後における勝田の出発、文部省教科書局内の実情と雰囲気、論文「科学による行動の変化—教育内容としての社会科学」、文部省から学習院大学へ、1951年から1958年まで、旭丘中学調査

第一部 教育学の探究

教育研究運動への参加、社会科論争と生活綴方、子ども研究、教育的価値論の探求、教育的価値の定位、国民教育における「中立性」の問題

第二部 晩年の勝田—未完の教育学

勝田の生涯最後の研究、教育学研究の前提と領域、教育学カテゴリーの再吟味、人間能力の構造について—知能・知性・叡智、一般能力と専門能力、能力形成とトーマス、学力の年代誌、学力のシステム把握、人間の成長・発達把握、言語と思考とのあいだ、知覚的論理的スタンス、感情・情動的モメント、ビゴツキー・ピアジェ問題（Ⅰ）、ビゴツキー・ピアジェ問題（Ⅱ）、ピアジェの思考図式への疑問、発達の「まわり道」としての教育、ことば（言語）の教育、ことば（言語）と学習との関係、なにを教えるか、どう教えるか、教育における「科学的」の意味、教育における「労働」の意味、国民的教養、「全面発達の無限の可能性」の問題、社会「統制」としての教育、教育と文化と自由

坂元氏は、勝田の教育学形成を第5期に分けて分析した。第1期（1929年から1942年）、第2期（1942年から1945年）、第3期（1945年から1951年）、第4期（1951年から1958年）、第5期（1958年から1969年）。

勝田を戦前から戦後にかけてその全体像を明らかにしたのは、この論文がはじめてである。今後、多くの人々による検討が望まれよう。

第1部と第2部は、戦前から戦後にかけて勝田がどのように教育学研究を展開してきたのかを分析し、また、とくに、哲学研究からなぜ、教育学研究に自らの主要舞台を転じたのか、その理由を、戦争の反省

に求めている。この点は、坂元論文の重要な特色である。

第3部は、今日の戦後教育学批判を踏まえて、勝田教育学の可能性（批判的継承の必要性）を論じものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

- ① 佐藤広美、「子ども把握と教育実践の全体構造」『教育』770号、62-70頁、2010年、査読無
- ② 佐藤広美、「子どもとともに生き方を問い、平和の文化を考える」『クレスコ』108号、30-32頁、2010年、査読無
- ③ 佐藤広美、「道徳教育と人権教育について」『教育』764号、4-9頁、2009年、査読無
- ④ 佐藤広美、「自己責任イデオロギーを溶かす教育実践」『教育』763号、14-21頁、2009年、査読無
- ⑤ 佐藤広美、「戦後教育学における「倫理的な問い」」『教育』758号、67-75頁、2009年、査読無
- ⑥ 佐藤広美、「人間性の回復と教育のナショナリズムの問題」『平和・非暴力の教育とナショナリズム』民研研究論集3、53-68頁、2008年、査読無
- ⑦ 佐藤広美、「戦後教育史とナショナリズムの問題」『人間と教育』60号、37-44頁、2008年、査読無
- ⑧ 佐藤広美、「なぜ、改訂学習指導要領の社会観を問題にするのか」『教育』753号、17-24頁、2008年、査読無
- ⑨ 佐藤広美、「目標管理システムとしての教育振興委基本計画」『クレスコ』19-21頁、2008年、査読無
- ⑩ 佐藤広美、「学習指導要領改訂の社会観を問う」『教育』746号、20-27頁、2008年、査読無
- ⑪ 佐藤広美、「「美しい国、日本」を支える教育観を問う」『教育』745号、90-97頁、2008年、査読無
- ⑫ 佐藤広美、「「徳育の教科化」と「美しい国」との関係」『クレスコ』78号、14-17頁、2007年、査読無
- ⑬ 佐藤広美、「安倍内閣の教育観を問う」『教育』739号、94-97頁、2008年、査読無

〔図書〕（計3件）

- ① 佐藤広美『アジア太平洋戦争と教育科学研究会の結成・解散・再建』科研費報告書、2010年、66頁（1-59頁）

- ② 坂元忠芳『勝田守一教育学ノートーその戦前と戦後』科研費報告書、2010年、232頁、（佐藤広美聞き取り調査を踏まえての成果報告書）
- ③ 田中孝彦他、大月書店、『現実と向きあう教育学』、2010年、269頁（232-247頁）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 広美 (SATO HIROMI)

東京家政学院大学・家政学部・教授

研究者番号：20205959